

国立代々木競技場第一体育館で初開催！

～第64回全日本フェンシング選手権大会(個人戦の部)～

社団法人日本フェンシング協会 常務理事 山崎 豊

第64回全日本フェンシング選手権大会・個人戦の部は、9月8日から11日にかけて、国立代々木競技場第一体育館において開催されました。フェンシングの大会を代々木競技場で行うのは18年前の1993年アジア選手権以来ですが、そのときは第二体育館でしたので、第一体育館では初めての開催ということになります。

さて、東京での全日本選手権開催は、実に41年ぶりのことです。昨年までは、国民体育大会の開催地が国体のリハーサルを兼ね、前年度に全日本選手権を開催することが慣例となっていました。

しかし、開催地の負担も大きいことから、縮小を余儀なくされ、日程短縮、参加選手数等の制限を行わなければならない状況が続いていました。一方、選手強化の面からは、国内でも国際試合並みの厳しい試合を経験したい、させたいとの声がトップ選手や強化関係者から出されてきました。また、従来の出場数では大学生の出場枠が少なく、伸び盛りの選手をトップクラスに挑戦させる機会が少ないことも指摘されていました。

このような中、協会内に全日本選手権改革検討委員会を設置し、抜本的な改革案を検討しました。そして、団体戦は従来どおり国体開催地での前年開催とし、個人戦は分離し東京で開催することとしました。選手数

も従来の各種目40人枠を大幅に増やし84名へ増加、これによってプロック予選と学生の出場枠を増加し、さらに高校総体やジュニア選手権等の優勝者などにも出場権を与え、幅広い層からの参加が可能となるようにしました。また、開催時期を世界選手権の開催直前に変更し、世界選手権に向けての緊張感を高めるとともに、試合方式としては一回戦5人の総当たりプール(リーグ)戦だったものを世界選手権と同様の7人の総当たり戦に変更し、プール戦の成績上位64名がトーナメント戦に進む方式に改められました。

会場については、開催時期、参加選手数の増加に対処できるアリーナの広さ、交通利便性など全日本選手権に対応できる会場として、代々木競技場第一体育館を候補としました。いうまでもなく、代々木競技場は、1964年の東京オリンピック競技会場として建築されたものですが、つり屋根と側壁の曲線で構成されたフォルム(形態)は、半世紀を経て、なお飽きることの無い美しさと威容を誇っています。そして、岸記念体育会館や代々木公園に隣接し、原宿駅からも徒歩数分に位置するなど、景観的にも環境的にも全日本選手権に相応しい会場といえます。

会場が決まりますと、ピスト(試合を行なうコート)数や配置計画、国内大会では初となる大型審判器やビデオ判定機などの最先端機器を設



初めて導入されたビデオ審判

置するための配線計画、そして詳細な進行時間などの検討を行いました。ピストは決勝用も含め17ヶ所となり、一度に多くの試合が行なわれるため審判員も30名を超え、器材を扱うスタッフも必要となります。また、試合は電気剣を使用するため、通電や安全性をチェックする検査室やメンテナンスのスペースなどが必要となりますが、第一体育館は部屋数も多く、その面での支障はまったくありませんでした。

観客席はアリーナとの高さの差が比較的小さく、見やすく、選手への声援も届きやすくなっており、観客と選手が一体となった臨場感溢れる試合が行なわれていました。

このような会場で行われる大会です。運営委員会としても、潤沢とは言いがたい予算をやりくりし、会場の雰囲気づくりにも可能な限り、取り組みました。世界大会並みの色分けされた4つのピストや決勝

ステージもそのひとつです。多くの選手にとっては、国内で、このような会場での試合を経験することは殆どなく、ほどよい緊張感に包まれながらも、闘いに向けてのモチベーションを高めるには申し分ない状況だったと思います。

競技は男女のフルーレ、エペ、サーブルの各種目、計6種目が行なわれ、参加した選手総数はおよそ500名となり、予選から決勝までの全ての試合数は1800試合を超えています。

優勝は、女子フルーレで菅原智恵子、同サーブルは中山セイラの連覇に対し、男子フルーレは藤野大樹、同サーブルは徳南堅太が初優勝と対照的な結果になりました。経験がものをいうエペはベテラン勢が健在で、男子は奥雄が2年ぶり、女子は、中野希望が4年ぶり優勝となりました。そのような中、中学生も各種目に出場し、男子フルーレでは、7位



4色に分けられたピスト



男子フルーレ決勝戦

に入賞する選手がいるなど、出場数の改革についても一定の成果を表すことができたと思います。

また、最終日の決勝戦はNHK-BS1での生放送が行なわれ、朝からタイムスケジュールのチェックを頻繁に行ないながらの運営でした。途中、選手の負傷などのアクシデントもあり、放送開始時間に間に合うかどうかという緊迫しながらの運営でしたが、なんとかうまく収まりました。

初めての会場、ビデオ審判の導入、決勝ステージ、ルール説明と体験コーナーなど、初めてづくしの中で、運営が不安視されましたが、役員、審判員、ボランティア、製作会社など関係スタッフの協力、協賛企業のご支援そして国立代々木競技場のスタッフの皆さんのご指導に支えられ、何とか及第点は得られた大会だったと思います。



体験コーナー

一方、改善すべき点としては、広報活動や室温対策などがあります。一般の方々への広報は不足しており、観客席は空席が目立ちました。また、節電対策もあり、午前中の冷房使用は控えていましたが、観客席では汗ばむ人も見られ、選手のパフォーマンスを十分引き出すには、少々暑すぎたようです。

本大会はフェンシング競技の発展とともにロンドンオリンピックに向けての有意義な大会でもありました。そして、この大会を通し、様々な経験と多くの成果を得ることができました。

多大なご支援、ご協力を賜りました。ご関係の皆様に変更して御礼申し上げます。

理事長就任あいさつ

10月1日付けで、独立行政法人日本スポーツ振興センター（NASH）理事長に就任いたしました。ごよろしくお願ひ申し上げます。今年（平成23年）6月、スポーツ振興法が50年ぶりに全面改正され、「スポーツ基本法」が成立し、8月24日から施行されました。

「スポーツ基本法」においては、前文で「スポーツは、世界共通の人類の文化である」と謳い、また、国際社会における日本のプレゼンスを向上させる観点から、スポーツ関連資源の活用をすることで「スポーツ立国」を実現する、という決意が述べられています。

こうしたスポーツ界の大きな変化の中、NASHは、「スポーツ基本法」の理念の下、我が国におけるスポーツの推進を図るための中核的専門機関として、国や公益財団法人日本体育協会、公益財団法人日本オリンピック委員会及び地方公共団体等関係団体の皆様と相互に連携・協働し、そして、国際的な視野を持ちつつ、各事業について、以下のような取組を推進していきたいと考えています。

まず、今年で販売開始10周年を迎えたスポーツ振興くじは、「国民の皆様へ愛されるくじ」「地域スポーツの活性化に貢献するくじ」として、さらなる助成財源の確保と効率的・効果的な助成に努めてまいります。

次に、国立競技場、特に国立霞ヶ丘競技場は建築後50年以上を経過しております。また、2019年には、我が国においてラグビーワールドカップの開催が決定しており、「スポーツ基本法」にもある「国際競技大会の招致や開催の支援」に向けて、その再整備が喫緊の課題となっております。国や東京都等関係自治体及び関係団体とも連携を強め、世界のモデルとなるような施設を目指したいと考えています。

国立スポーツ科学センター（JISS）も今年で開所10周年を迎え、ナショナルトレーニングセンターとあわせて、一層の機能強化を目指すとともに、関係団体との連携を強化し、NASHの持つ資源を活かして、事業を推進します。

また、学校の管理下における児童生徒等の災害に対する「災害共済給付業務」と災害を未然に防止するための調査研究並びに研究成果の活用による「学校安全支援業務」を相互に連携させることにより、児童生徒等の健康の保持増進を図るための役割を果たしてまいります。

加えて、「国家戦略」の一つとして位置づけられたスポーツの推進に、NASHがより深く貢献するためには、「国際力」とともに「情報」が大きな鍵となると考えています。今後、情報収集・分析力をさらに強化し、スポーツ政策等に資する企画・提案・検証力を強化することによって、国及び関係団体の皆様とのしつかりとした協働作業を行ってまいります。

コーポレートメッセージ「未来を育てよう、スポーツの力で。」には、明日への力にあふれた日本の実現に向けた、NASHの想いが込められています。

今、日本は大変厳しい状況に置かれています。NASH役員一同が「スポーツの力」を強く認識し、スポーツを通じて限らない可能性のある我が国の未来を育て、国際的にも貢献できる日本を国民の皆様と一緒に目指してまいります。

皆様の一層のご支援とご協力を賜りますよう、心からお願ひ申し上げます。



独立行政法人日本スポーツ振興センター

理事長 河野 一郎

3 National Stadium